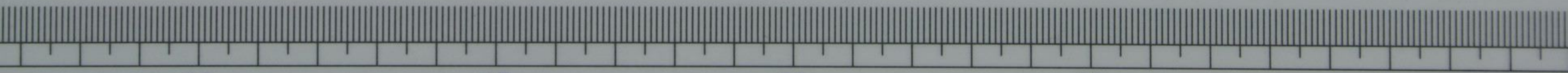




季  
 註解  
 改正月令博物考  
 六月部  
 三

5  
 529  
 7



10

15

20

25

30

門 = 5  
 號 529  
 卷

六月部目錄

一印ある非措  
 の季と持物

○穀類の法、風雨の考、米の豊凶  
 ○製茶の方、其外人家製法の支と  
 ○如をよめる少人目録ありたり

育

卦 月支 調子  
 陰陽生 異名

小暑節

二十 大暑中

日令

此部ハ六月日の定りたる  
 支の定りたる事とある

氷室

氷餅 三丁 日 御飯 三丁

献禮酒

三丁 一夜酒 六丁

勝曼祭

一丁 富士詣 六丁

六月會

六丁 天祝節 六丁

制表神麴

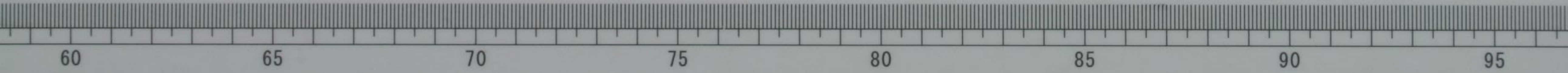
六丁 水貯 六丁

祇園會

六丁 山鉾 六丁

- △舟舁 △五津 △岩窟 △白出山 △三葉山
- △郭巨山 △琴破山 △端脚山 △白奈大山
- △太子山 △木賊刈山 △芦刈山 △山伏山
- △花盗入山 △天神山 △鷺舁

日朝



日九十		日七十		日六十		日四十	
△稻荷祭	六丁	△鞍馬竹切	六丁	△志渡寺奉	六丁	△江戶山王祭	六丁
△座摩御後	六丁	△賀茂手洗祭	六丁	△相国寺肉體注	六丁	△熱田祭	六丁
		△内宮御祭礼	六丁	△嘉祥祝	六丁	△津嶋祭	六丁
		△糺涼	六丁	△嘉定銭	六丁	△祇園會	六丁
		△上難波御後	六丁	△外宮御祭礼	六丁	△富士雪解	六丁
				△博多祭	六丁	△松園臨時祭	六丁
				△御灵夏神樂	六丁	△竹生嶋祭	六丁
				△嚴嶋祭	六丁	△解拜御粥	六丁
						△月次祭	六丁

△愛宕子日詣	六九丁	△天橋立祭	六九丁
△水無月能	六九丁	△鎮花祭	六九丁
△水無月能	六九丁	△道邊祭	六九丁
△川社	六九丁	△形代	六九丁
△小堀寺神	六九丁	△茅の輪	六九丁
△上賀茂水無月能	六九丁	△住吉御後	六九丁
△唐崎十日詣	六九丁		

**月令** 此部より六月一ヶ月日の定まるるをいふ

△土用干	六丁	△施茶	六丁
△雷鳴の陣	六丁	△香薫散	六丁
△夏節	六丁	△霍乱	六丁
△浚井	六丁	△三伏	六丁

九夏三伏

六

萬鬼行

六

水掛合

六

竹婦人

六

籠扱

六

漆取

六

鴛鴨涼

六

船遊

六

汗流

六

白袋

六

簞

六

泉

六

清水

六

清水

六

雲峯

六

時令

此部より六月一ヶ月の時  
候の事と一〇

土用

六

夕立

六

露涼

六

夏露

六

風薫

六

青嵐

六

暑

六

日盛

六

訪暑状

六

同報答

六

涼

六

納涼

六

晩夏

六

秋

六

草木

此部より六月一ヶ月の  
草木の類とありむ

百日紅

六

菖蒲刈

六

麻

六

苧麻

六

綿の花

六

竹皮散

六

烏扇

六

玉簪花

六

釣鐘草

六

麒麟草

六

馬鞭草

六

猫見眼暗草

六

剪春羅

六

虎尾

六

昼白

六

夕白

六

狐

六

南陸花

六

山慈姑

六

鷺草

六

△蒲穂 六丁 薙摩 六丁

△绿豆 六丁 芡実 六丁

△赤草 六丁 △慈姑 六丁

△河骨 六丁 △菱花 六丁

△蓮花 △白蓮 △紅蓮 六丁  
△水ふり △池 △舟 △あなま

△荷葉 六丁 金蘭の花 六丁

△蘭川 六丁 席草 六丁

△菅刈 六丁 △藍 △あしの刈 六丁

△榊茂 六丁 △青田 六丁

△田草取 六丁 △芦茂 六丁

△林檎実 六丁 △早桃 六丁

△青鬼燈 六丁 △青蕃椒 六丁

△藜荷子 六丁 △凌霄花 六丁

△凡蘭 六丁 汐見坂 六丁

△神馬藻 六丁 △瓜 六丁

△豇豆 △小角豆 △青きりげ 六丁  
△十八きりげ

△甜瓜 六丁 △瓜皮 六丁

△白梵天 △梵天瓜 六丁  
△干瓜 六丁

△熟瓜 六丁 △菜瓜 六丁

△南瓜 六丁 △南京瓜 六丁

△阿古陀瓜 六丁 △猪花 △後とち中 六丁

△紫蘇 六丁 △蒜根 六丁

△胡荽 六丁 △蕎実 六丁

△夏切茶 六丁

△種植 種く。寒 六丁  
水とそく。さ 六丁

△生類 此部より六月一ヶ月の  
いき物とあつてしす

△燈蛾 六丁 △蟬の法声 六丁

△蟬脱 六丁 △空蟬 六丁

△夏虫 六子 △残蠅 六子

△金龜子 六子 △鳥毛虫 六子

△蟻 六子 △蟪蛄 六子

△練雲雀 六子 △藍雲雀 六子

△鷓鴣 六子 △鯖鮪 六子

△海月丸 六子

**必用** 此部は風雨占日取の必用料理献其外重法の手記

△煮飯 六子 △瀧繪 六子

△瓊脂菜 六子 △冷索麵 六子

△納豆仕込 六子 △梅油造 六子

△奈良漬製 六子 △麻地酒 六子

△水の粉 六子 △砂糖水 六子

五月節目録終一

### 六月之部

陰ハ上天ト 地下ハありて 此時陽氣 盛ニ其 時令ハ陰 以て仁慈ト 行キ



**異名** △旦月 △朔月 △陽水 △庚伏 △元陽 △季夏 △晚夏 △恒夏

△水無月 △鳴神月 △常夏月

**異名註** △且月ハ爾雅 六月ニ 且ト云クあり △朔月

場山井ニ出○陽冰是詳ナリ

火旺ニ金火ト畏ル庚日心ト伏ニ

○季夏長ハ人ノ夏ニ晚夏ヤレ

△林鐘ハ林ハ衆ニ鐘ハ聚ニホリ  
事ノ物ノ久クホリヨリ  
○鐘ニ鐘ニてハマノカノ  
△風待月風  
の稀ナリ月ナレハ水無月  
水ナリ云畧ニ△鳴神月雷多故

莫傳 涼月

風ニけハ沁ニ流ナリツト  
△蔵玉 ここニツ月

同 月ニゆる花ノコ  
りハ妹ニコゼン  
松風月ノ夕ニ

秘藏 いとニ月

七月ノ節  
小暑  
大暑  
立秋  
処暑  
白露  
秋分  
寒露  
霜降  
立冬  
小雪  
大雪  
冬至  
小寒  
大寒

七十二候。草木七十二候。日の出  
入。昼夜長短と記し註を加ふ

節



六月の節  
小暑  
大暑  
立秋  
処暑  
白露  
秋分  
寒露  
霜降  
立冬  
小雪  
大雪  
冬至  
小寒  
大寒  
△温風ハ風ニ吹テハ吹テハ  
秋の氣近クナリ  
鷹始撃トハ鳥ヲ取ル事  
秋の金氣近づくハ自然  
鳥感シテ鳥ヲ取テ殺ス事  
名ナリ蓮ハ実ハ名ナリ  
桐  
花ハ此月香  
栗  
日本  
長  
津  
家  
佛  
菜  
モ  
花  
献  
セ  
事  
ナリ

中大暑七十二候。神未七十二候。昼夜長短。日の出入等左記。



腐草為螢。芒種に入らざる草。暑かひこれて螢こ生じあふまるとも本朝  
 其の中夏の盛んく和漢少く  
 時候のちういあつ日のなごう  
 この時土用されば土潤ふ暑なり  
 まうれども火の盛んさうふひいそ  
 らまて暑さ甚し雨も此土用の  
 湿氣を陽氣のこうんかきかひ  
 のりて大雨降る。鳳仙  
 の鳳仙花の種も時へ。鶏冠花のく

日令  
此部は六月日の定まる事支の定りうと他との条の所は板とすも大抵条は同一ゆ

朔 天氣  
 風雨あれ米價貴し  
 西南の風い虫こま

日 氷室  
 氷室の氷い  
 四月朔日

九月盡まで献じりものるれい  
 今日と専守此時御膳み水  
 と奉るそののののの仁徳  
 天皇六十二年額田の王子狩ふ  
 出さぬい氷室を見て土人小問  
 たま土を一丈余掘りて草と其  
 上小苗氷をみしひれ極暑ふ  
 らけごと申す王子この氷と  
 取て仁徳帝小奉らせり  
 その始て民間より是も准  
 氷餅と祝ふ(お)夫木 俊成

氷室の雪氷室の浮洲氷室の  
 氷室の雪氷室の浮洲氷室の



極氷の面はひらろ免す。枚の下風

皇の愛は、この代の子は、山に風を

士高。宋清。花の陰をた。山

傳。山。山。山。山。山。山。山。山

けて。山。山。山。山。山。山。山。山

運。山。山。山。山。山。山。山。山

非。山。山。山。山。山。山。山。山

氷室。山。山。山。山。山。山。山。山

故事。山。山。山。山。山。山。山。山

傳。山。山。山。山。山。山。山。山

藏。山。山。山。山。山。山。山。山

飯。山。山。山。山。山。山。山。山

獻。山。山。山。山。山。山。山。山

一夜酒。山。山。山。山。山。山。山。山

非。山。山。山。山。山。山。山。山

祇園會。山。山。山。山。山。山。山。山

愛。山。山。山。山。山。山。山。山

駿河。山。山。山。山。山。山。山。山

安。山。山。山。山。山。山。山。山

三。山。山。山。山。山。山。山。山

日。山。山。山。山。山。山。山。山

天。山。山。山。山。山。山。山。山

京。山。山。山。山。山。山。山。山

江。山。山。山。山。山。山。山。山

法。山。山。山。山。山。山。山。山

恩。山。山。山。山。山。山。山。山

所。山。山。山。山。山。山。山。山

本。山。山。山。山。山。山。山。山

所。山。山。山。山。山。山。山。山

法。山。山。山。山。山。山。山。山

恩。山。山。山。山。山。山。山。山

所。山。山。山。山。山。山。山。山

本。山。山。山。山。山。山。山。山

所。山。山。山。山。山。山。山。山

寺谷中宗延寺 四ノ六 日會  
法花千部執行 日傳教大師

忌日寺々行る坂 枕御羊高と云く有 江戸 箕輪

天王 五ノ日 祇園會山 江戸

祭 日 牛頭天王祭 六ノ日 天賜節 宋神

帝詔して今日と天賜 天氣 暗

の節と云く不成就見 秋收多し雨多し秋水 多し風雨多し米價貴し

制衣神麴 今日も製衣のふし 本艸小委し

水貯 此日水を取淨く煮て收め 貯ふ一年と越しと云く

らす此水にて醋醬油又ハ漬物も 与るハ一年過ても懐きおとく

京 祇園手水の井と開く鳥 丸三条坊門の南ある井入

今日より十四日まで蓋とひり きてお引松立しと 往來の人々

水ひらび七 祇園會三社神 休るあり 日 輿今日卯の下刻

本社より祇園町と四条寺町 御旗所ふ十四日とて御出さる

七日より十八日まで四条 河原に夕まきみあり是て

△河原とくことり

排 祇園寺と何と被ふ人の山 保友

狂引てあると云くは過ゆると云く くらや祇園の令者定難之行風

山鉾 卯下刻四条高倉より 寺町へ出松原迄下りて

より東洞院へ長刀鉾 函谷鉾月 鉾行て自分の町々へかゝる△菊水

鉾 板下鉾 舟鉾 笠鉾 岩戸山占 出山 孟宗山 郭巨山 琴破山 蟠蟻

山 白樂天山 太子山 木賊刈山 芦刈 山花 盆入山 山伏山 天神山 雞鉾

江戸 神田天王祭 南てんま町 御出の品川天王祭 両

社の御輿中の橋のうへへて 行合南北へふる故は行合の橋と云

八 江戸 浅草天王祭

九 京 北野天満宮九度 江戸 東の観音堂より

鳥越明神祭 隔年子寅辰の千住 橋の上へ七綱と引合年豊凶と云

十日 御躰之御占

神祇官の官人主上の玉躰と御 けりみあひ人事と占ひ奏と云

十一 京 吉田西天王祭 比 源又見と云 叡山恵心院 源信 忌

江戸 神田牛頭天王神輿小船町 御旅 今日辰出十二日

十二 月次の祭 十二月の御 諸神へ御

幣と奉り 神今食 伊勢の大神 官に勸請

申さぬ天子と云ふ神膳と供 せむのさるる 年々の 大道大納言

松尾神 二 天氣 今日烈 風と去

と邦若譜 解齋之御粥

日の御座は大床とて其盤一脚 と立御膳ありき土器は和板の

御汁物とてそのまじり三口 免されて御器と云ふと云

祇園會山 堀 大寺三村 不成 船引初 明神祭 日就日

京 祇園會 卯下刻山鉾三条東洞院

寺町へ出四条へ下りそれより 西へ行自分の町々へ帰る。橋弁慶

山八幡山悪山宇治の合戦津

鈴鹿山鯉山鷲音山鷹山黒山

松鋒○未刻神輿三座御旅所四

条寺町より西へ渡り少将井の

神輿三座の四条東洞院より上り

二条と西へ御城の前と大宮へ出三

条大路と御神供社へ至りなう人

三條異門通の角あり二座の神輿の四条と

こくふ鳥丸へ出をし松原へ

下り西大宮迄行北へ上り三條御

神供所より至り三社の神輿一所母

會いかへ此所ふて神供と奉り吟

改り三條と東へ寺町と四條本社へ

還御俳山くやまて出るさん

のと琴を引き人をやせんが

りらくり乃し山曾呂利江

戸 龜井戸香 大坂 難波村千

取社祭 頭天王祭

近江 △竹生嶋祭日今明

△津島祭今明是

△芦御輿△熱田祭

園臨時代祭 勅使立あづ

奉らると公事根源ありと

院垂拂○吉江戸 一江山王祭

田小角豆祭 礼隔羊丑

赤坂冰川大明神祭隔羊

浅州観音祭今日ひんさの神事

芝浦小難網下と今日返禁制人

大坂 三津八幡神事今天王寺

講堂蓮華會午の刻

富士雪消 今日たくり富士

の雪消さつつ

方万事ふ

姉のひまりついまいとる月の

連<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>改<sup>メ</sup>一<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>夏<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>吉<sup>吉</sup>相

**十六 嘉祥祝** △嘉祥祝 △嘉祥祝 △嘉祥祝 △嘉祥祝

豊後国より白亀と奉る吉兆とて

て年号と嘉祥と改む一説又

同帝の時御代の采と賀茂と祈ら

せり今吉日へて御枝あり年号

嘉定と改むといふも実記見えず

一説より室町家の納涼の遊ふ

揚弓を射て負うるの嘉定錢

十六文を出も嘉定の宋の年

号十七年まで毎年錢を鑄こ

し元年毎ふさたりあり此元年

より錢十六 **袖直** △袖直 △袖直 △袖直 △袖直

文を用ひしと △袖直 △袖直 △袖直 △袖直

とも今日袖ととりて振袖と着

し座鋪へ出て父母よまると人

盃をいささ乳母るととと盃

事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見るをこれよつて月

見の祝儀ともい故実なり御

作法の猶 **伊勢** △伊勢 △伊勢 △伊勢 △伊勢

故実あり **伊勢** △伊勢 △伊勢 △伊勢 △伊勢

**讃岐** △讃岐 △讃岐 △讃岐 △讃岐

**筑前** △筑前 △筑前 △筑前 △筑前

**京** △京 △京 △京 △京

持院虫干の **大坂** △大坂 △大坂 △大坂 △大坂

つ川夜宮祭 **伊勢** △伊勢 △伊勢 △伊勢 △伊勢

**安藝** △安藝 △安藝 △安藝 △安藝

**京** △京 △京 △京 △京

祇園御奠洗 今日み

くとおま奉る山寺

室寺観音開帳の桂川神事能

井大二衆山門のちの執行す

**江戸** △江戸 △江戸 △江戸 △江戸

四谷天王祭 **九** △九 △九 △九 △九

日成道 **京** △京 △京 △京 △京

賀茂御手洗祭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

△座頭 **座頭** △座頭 △座頭 △座頭 △座頭

納涼。清聚菴の寺へ遊る

狂。産院産婦くまれの酒をこれ  
けしとてひそけを夜更まろう 宗増

九月 天気 今日雲もつら  
ハ豊年のさしこ

京 △鞍馬竹切 當所の土人本堂  
と西観堂と両所は集り西方

青竹とて又井も切て立置本堂は近  
江方観音堂の丹波方とて二山の院

大法事を行ひ終りて双方相違定  
声と合は彼大竹と三伐と七曲の切石の

りて走りゆく早き方で勝とて夜  
よ入て奇怪の事も多くありそ

一坂 △上難波祭。はか町  
二坂 仁徳天皇の御祭礼に俗にあり

京 不成 柳の尾  
内宮 就日 虫下

院御景御開帳 大坂 座摩宮  
御坂

座摩の祭の神五座と神輿御渡り  
の道筋の朝辰の下刻とてとととと

本町へ出塚とて高麗橋へこころ夫  
より東へ大津町のおうび所へ入る

同く申の下とて同く申とて  
久太郎町へ西へとて選御あり

北 三 京 松尾神 九  
事能 四 京 △愛宕千日  
日 識廿三日の  
夜あり

△東寺 後宇多院御忌并弘法大師像  
関帳 〇松尾神事能 〇要法

寺虫拂

江戸 芝愛 五 京 黒谷虫  
宍祭 日 干

本能寺虫干 〇誓願寺 江戸 龜  
虫干 〇妙顕寺虫干

天満官神輿舟をて豎川より一  
の橋此川口まで渡御此所にて

名越の御 大坂 天満天神宮  
拔あり 御後朝巳刻

神輿二座渡らざらん天神橋通  
を大川とりの濱側へいで難波  
橋まで是より舟を召き大川を渡  
り島やらの宮へ入る夜に入て還御

丹後 △あまの橋立まうり  
○切き戸文殊會

北 越前 日永嶽祭 吟日  
北八日子とてなり  
常の委請なり

北 京 本國寺虫干  
北八日 京 嶋  
○大徳寺垂世忌日

住吉祭 ○妙心寺方丈虫干 ○  
加茂水無月飲 今日より晦日まで

北 大坂 玉造繪荷夏神樂 ○  
内平野町神明同断

晦 不成 天氣 風雨あまの米  
日就日 賤くかた南

風い虫 節折 竹も主上の  
をまゐる 御ふけの寸法

をとりて其やとふ折あてふいよ  
とりといふなりよりの命婦官

主よ仰せて御 鎮火祭 部  
扱とつとひる

氏の人火を打て官城の四方の隅  
りて祭事火災をふせせんが為

道郷食祭 是も都の四方  
りて鬼魅の他

方より来るを入まざるんを免  
み路上は供物をそへ祭る

大扱 昔の百官とくく朱雀  
門の出て扱をなす麻

の葉を切て扱すらへ麻を扱  
草といひんべ。此水無月扱の

と説多し春より夏かうつるの  
春の木夏の火よて水生火く

其外も皆相生あるも夏より  
秋よりうつる夏火秋金火尅金

と尅をさす扱ふとらり 然も  
ども土用四季のわけて夏の土

用を以擧ぐす是中央土用の  
位よりを以てるりあつかひてい

玉生金と相生之。按ずるに  
九夏三伏のもつきの邪鬼のこ

くされがさうのさうを  
行年の半  
を守りべしと此月後をす

かりはごの後も夏越の畧言  
なりつぎの詞の処は委し

年中行る旨合  
夏はごの麻の入れさうと

りこのはごのは後さうと  
續古今 夏後 家隆

えられてはごの麻のゆふと川  
波あの上よとをさうと

玉葉 名越後 兼行  
風さうは波の波は夏と

千載 六月後 李通  
かふられの麻の立枝はゆふと

夫木 夏神樂 公朝  
河社志のまうとへあさうと

堀川百首 河夏後 成行  
は後川小夜文わらう麻のま

同 荒和後 仲実  
八百多神もはこふなしくらん

詞 初言 秋風麻の葉若糸長豆大  
海流繩川流 浪色 空る月日里村 幽

△後川△夏後△文後△夏神樂△水月  
後△麻のまふ流△まのまふ流△後ま

△夏ま 具 具 具 具 具 具 具 具 具 具  
具 具 具 具 具 具 具 具 具 具

連 後さう水はふのらとりや 泉祇  
誹 夕そよは後そ夏はごや 小長

是とと夏ふいと夏は後小 涼帝  
狂 春の枝と夏はごりさうは後

△中長のをひすうと 後守宗増  
川社 夏後小川辺又棚を構

形代 △撫物△御後さう人形と作  
△右人形とを身のま



んと後小川 **小蠅ふし神** の

どく悪邪多きこといふ日本記  
いづ是も夏の熱邪をいふなり

今日ハ花柳のこころいふなり

**茅れ輪** 午頭天王菰民將  
未ふ敷へぬ置風

疫病の時是こかれ災難通ん  
能振社と結んで儂る茅れ神ハ翁詔

**京** ○上加茂氷無月能  
○建仁寺泉涌寺布薩戒

**江戸** ○浅草寺花講  
△佃島住吉の御後

**大坂** △住吉御後 所々より移り物  
櫛の掛灯のりくのかうり

手とけりて渡る午の刻頃よ  
こもかより鷹野師社人社僧神

馬等かき限りもなく次第の  
列を守りてくる四社の神輿

と祭奉る社務ハ車にて反橋  
の本小立る神輿一社七度

北濱小出奉り潮りてりい  
くろのいそれより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと  
と奉り夜に入り神輿住吉還幸

其節堺より送る者住吉迎人多く  
火ととり夏昼のほ是と火替と

狂 夜後同のゆく方や法談は嵐雪  
まの狂は自新

**近江** 唐崎千日  
黍り御後

**月令** 此部より六月一ヶ月日  
の定まらざる事と記す

**土用干** △虫干△虫拂○書衣等  
の中は白奥と去之故虫干云

能 嫁令の柳を土用が其角  
接脳小世をいふこの程うか全

**京** 妙心寺虫干○天龍寺虫干  
○大徳寺虫干いづれも定置

**施米** 山寺の僧は米塩を乞ふに公より下さる。年中行事

この月のきふより暑て知れぬ。君が先きの秋のふのとは

**雷鳴之陣** 三度高くする。かゝるりの声

色は大将以下近衛の次將迄。弓箭を帯ひ御殿に孫廂に

候して天子と守護し奉る。と公事根源等小見へり

**香薷散** 暑氣の頃専ら用る菜方なり

暑氣のわたりとらとらと治と。香薷散は縁たてまは其備

**夏節** 小兒の頭面は無名の腫物づつとるなり

**霍乱** 病の名は夏瘦。霍乱妙薬陳皮生姜

水煎用也。あしの根より。苦の葉とせん。吞てより。〇たでの

実香需せん。てのひびり。〇又法。かして種りやをふけてより

**浚井** 曝井ともいふ。井戸。あて夏日井と新よとれば瘟病と

やま守と見へり。むう。此月井水と替り。とまり。今七月

は井をいささふふことなり。三庚閑日。よひ。夏至

**三伏** の後第三の庚。此日を初伏第四の庚を中伏立秋の

後最初の庚を末伏といふ。この本篇博。占候。三伏の

物筮ふり。内西北の風。あれは極月氷り多し。〇三

伏。多し。熱す。冬雪おとし。〇三伏の内。嫁娶をれはあし

〇木と伐。なり。虫をむこと。九夏。夏九十日。三伏の記。日記

**九夏三伏** 九夏の夏九十日。三伏の記。日記

九夏の夏九十日。三伏の記。日記

九夏の夏九十日。三伏の記。日記

**萬鬼行** 後漢の時伏日よハ  
鬼出ると盡日門

戸を閉ぢあつハ湯餅を作りて  
辟鬼と名づくといつろ。秦

のころやいろははかりて奈  
をる。虫災をぬせとて

**水掛合** 夏戯まよ水辺杯よ  
て水かけ合とてといふ

**竹婦人** 竹奴脚馬抱籠と  
て竹の籠といふ

或ハ足とりさせるとして涼  
しかりしむふとつゆのあり

**箆枕** 竹とりつて是とつふ  
竹細工の各地所々出を

**漆取** 黄ふして樹ハ中  
心黄ふしてかき

水ふ値て齋にわじ刀斧  
と以樹の皮小切目切けを

後棄トて黒色なり此汁と  
なつてこそとて取るなり

近国よてハ大和國吉野よハ  
多く此職あり組ハ籠ひて

取る物ハ是湿漆なり塗  
りの小用なり奥州羽州下

野より出る代セシメウル  
シとハ是上品なり吉野ハ

銀朱ふ合とてり用也越前  
至て下品なりとてくはしハ

日本と上品とハ唐土の塗  
ハとてつとつゆの故ふり

こへ渡るとて駭  
○此実より蠟をとるなり

りつと上品とハ此の蠟ハ  
死鳥鴨涼 此外月露る

とてれハ夏の季よなりなり  
○此実より蠟をとるなり

りつと上品とハ此の蠟ハ  
死鳥鴨涼 此外月露る

とてれハ夏の季よなりなり  
○此実より蠟をとるなり

りつと上品とハ此の蠟ハ  
死鳥鴨涼 此外月露る

とてれハ夏の季よなりなり  
○此実より蠟をとるなり

船遊

舟あそび 大名の我味 季州

汗疣

熱拂瘡 身うちよこぬる物

あせわの妙茶

あせわの妙茶

この切ロウてきとうてきとう。又

お登の土瓦粉あてつけてよ

又天瓜粉とせめて妙

白袋 掛香 掛香 掛香 掛香

狂 白袋 白袋 白袋 白袋

丁 子 の 中 は 久 清

簞 竹 の あ し る 庭 中

是 て あ る て 暑 と さ る

な り 又 藤 と あ ら る も あ り

龍 を こ ら た る 龍 の そ は 不 建 る 殿

壱 堀川百首

永緑

あまの杖を長く成ゆへ

つぐも小杖此をむくやみらん

續後拾 泉辺避暑 公通

女心のむと足法志らぶをこま

下は夏もかみのさうけり

雪玉 水風晚来 頭季

夕けあよ 吟人泉もさけまを

志が笑乃うく風涼かりたり

散木 對泉忘暑 家経

下るふ岩石のあはれさうかを

あまの風を切る人もあし

雪玉

水風晚来 頭季

夕けあよ

吟人泉もさけまを

志が笑乃うく

風涼かりたり

散木

對泉忘暑 家経

下るふ岩石の

あはれさうかを

あまの風を切

る人もあし

玉吟

深山泉 家隆

人いよに清あ

いふあまをさし

任るれよけれ

ふ乃下りあ

雪玉

樹陰散泉 贈左大臣

松の思ひを清

あむむさし

ワが思ひを清

あむむさし

玉吟 夏向泉 家隆

結ぶよふさびしう清なるあゆりて  
神みこくくさりり此下を

山家 向泉待友 讚岐

即ちうのこいも舟のあそびは  
こゝろを 軽も君をまわらん

詞増し。湧く。漾る。出る。洩る。松

陰の清き。岩よまてくる。万代に流ひ

けり。蛟。本流。山陰。谷。庭。衣。せ

さともかたは。まはるる。あひ。きかぬ

よそを。ゆるゆる。液。のへをえふ。忠

りつあ。かくく。ふ。あひの。し。と。ど。

連 本はるより流かむとく泉くを宗祇

三々く人の心をあふる水うか絶也

狂 文は目のあつちと抑ふ泉しそ

よ小結してふありの泉たるを

清水 △清水が瀬 △清水はひとく

○石間 △ある清くをめる水と

云源ハミをゆくさうむとよとい

手こそ汲きり清水汲も同一櫃

とらせれ入せささむらさき

ひかうこころせれささむらさ

◎きよひまきこ入相成のそま西ある

縁の清き流ひつるまに仲実

連 清き流ひつるまに仲実

非 名は流ひつるまに仲実

◎名は流ひつるまに仲実

雲峰 夏の末は白雲をびへ

時の間よつろく小替まらへ

午より後ふまへ此雲をく立

のかり山よりほきて下根を

くす次第小山下ろくるればやそ

夕まよらる

◎夏雲多奇峯 為明が詩なり

新題林 為綱

◎西よる月影はあつと大そらに

いさみのうらたはむらさき

草菴 頓阿

この時令は、  
なほ、  
なほ、

① 東方の事、  
② 南方の事、  
③ 西方の事、  
④ 北方の事、

此部は六月、  
時侯は、

時令  
此部は六月、  
時侯は、

土用  
四季に寄駐せ三月六月  
九月十二月の節に入十

三日土用の入るは十八日な  
こ四土用合して七十二日四季

とべて七十二日宛一年三百六  
十日なり十九土用といふも

子より後に入るは日数より九  
日といふも昼夜を合して正しくも

これやと十八日土用の夏を以  
正しく何れ故なきは春の木の土を

木と恐る故事なるは秋の金とて  
冬の水より金生水相生の間ふ

あれは感する事は冬も亦亦  
は春の木の間に水生木あり

是ふよつて春秋冬の土用の土  
專する事不能故は夏の火あり

秋の金に其間は土用ありとて  
正しく九夏の火より火生土と土

用を生し土用より土生金と秋  
金と生し一年の間なるは中央の

土令と爰は掲げて五行の序  
とある事なり

土用天氣  
東風のつても雨り  
成るものなるは土用ふ

の空暗て東風久しく吹とも雨ふま  
らぬ是と昔にらるも白くとも

の然まとも之より東風のこ  
ろけは終ふは雨ふちるなり

土用占候  
土用中晴天つじが  
五穀豊年なり久

雨の悪く夕立は土用ふ入三日  
は土用三郎と俗説のいふ此日と

土用中の天氣定ると雨ふること  
あつたは曇まると土用中の日和

とらぬか、晴天多れば土用中日  
和は○稲の豊熟土用を專

大切はと此節の日和う、暑強  
多れば虫生せんよく實の

**辟瘟疫** 土用蒜赤小豆と井  
菘水にて用おれ、年

中疫疾の患わすといふ  
おんはくのみつ、清るのふらぬ其角

**夕立** 凍雨暑雨、白雨○雨の  
ふらぬ、理の本筈ふらぬ

夕立の季、和漢の書は正理と  
みり、といふ、龍のふらぬを

つゝの妄説、夏月、くぐぐ、乃  
夕立りり、つゞ、豈ましくを龍

ちるべ、やそれ雨の地の水氣下よ  
天の上りて陽氣散してふら下る

さうち、さの湯氣、けふふあつ  
とらして滴り下るが如し、大暑の

節か至りて、天のふらぬととらぬの  
陰氣とらぬ、高遠かあり、其下は

陽氣とらぬ、じく、陰氣のふらぬ  
とらぬとらぬ、上らぬと陽と散

とらぬ、長雨さ、或はさぬとらぬ  
ふらぬとらぬ、曇ると陽氣とらぬ

晴ると夕立と、暴雨ふらぬと  
地の濕氣、陽ふらぬ、立らぬのかり

陰氣のふらぬ、はらぬと下は  
ひらぬ、立らぬとらぬ、じき時の中

途陽中の水氣とらぬ、散せんと  
とらぬ間、下より段くひらぬ、おす

と甚し、といふ、おらぬとらぬ  
下らぬとそれゆへ、其水氣の

とらぬと集り、とらぬ間の、降かより  
一丁二丁の間、とらぬ所とらぬと

所あり、其水氣の上らぬ、おのり  
と山くふ、おのり、白雲とて雲の

とらぬと、詠とらぬ、おのり、是外よりこれ

を空より出く雲のまうるれども  
左ふわび水氣を陽氣こそむ  
のむもえ次第ふ立上り下より  
段く上と時ハ白き氣集りて  
山さハの所次第ハ黒こがらる是  
つよく水氣の多く上るにより  
てるれハ雨ふる或ハ白雲り中  
天こそ高く立上らど横へなび  
けつハ雨ふび其故ハ下よりつ  
上と氣止むにより上りし水氣も  
陽氣こそ散ぶるゆへ横へるびく  
ちり山さハの根とくとふらと  
るも上る水氣つとたる故なれが  
つと上と氣なまふより上へ上り  
たるも散りてふら山林多と  
無ハ水湿多といより度く  
夕立さるなり山ありてハ元山ハ  
水氣なる富士山さど山のふり  
より中途もその材木ありにより  
地中より水氣上り雲をかへる

ともいつてきふ雲さハ山上ハさ  
山さるによりて之ハ夜電光すれハ  
其方角より雨ふる是ハ水氣  
の上と水氣上るとつと陰を  
うりありての上とつと陽み  
むされて陽氣の如く上る其陽  
氣發出る時ハうく火のい  
ふを見ふべしけりハ黒いと  
とも火災さどふて多くをゆさ  
本性をあらしてあらハ先ハ陽  
氣の上りけりれどハ故ハ此ハ  
ふ方より上るとの烈ハ時ハ止  
けりゆりやちる時ハ翌日ふる

新古今

公經

あすろをのまこさるるびま  
一むらさめゆきしら乃んを  
千首 夕立早過 後拍原院  
あつたやたの樹のまのま乃  
ふらをもさちとまよるすん  
玉葉 旗夕立 伏見院  
糸川引くもまのゆきしらみ



神を祀り 亦へと夜く務山  
續古 村夕立 知家

数有り火のけりりそ けりりくまの  
くまのさゆりをら乃乃山りく

玉葉 行路夕立 基氏  
とゆらんさ けりりまけりりくくく

われてそゆらん夕立乃乃雨

詞 けりり雨。風さく。雲はよりの  
けりりま。虹のけりり夕立。そ

を里人。まもりありあぬ。さぐ村  
多。せぐ。けりり夕立。新けりり

雨のけりり。けりり

連 浮橋とつや夕立。天はそ宗牧  
俳 夕立は花のけりり夕立。堂其角

夕立やけりり夕立。けりり全  
狂 けりり夕立のけりり夕立。子速み

けりり夕立。けりり夕立。常林

詩 白雨五字對句 同上  
竹 けりり夕立。けりり夕立。常林

ユフ夕立夕立夕立  
カミナリ山ニヒキ

山 愛夕陽 晴 千峯 鳴雨 過  
ユフ夕立夕立夕立 山ニヒキ

詩 白雨七字對句 詩 礎  
雲 開 星 月 浮 山 殿 喧 雷霆

山ノ上ノコトニオレシキ  
ライノコトニオレシキ

雨 霽 風 雷 繞 石 壇 抱 殘 虹  
ライノコトニオレシキ

詩 白雨之詞 唐 韓 偓  
猛 風 飄 電 黑 雲 生 風 ハ ケ ン ク

ニナリ 雲 々 高 林 簇 雨 聲 タレ  
ハサツト雨フリ来リ夕立ニ夕立ヨシキ

ノケシキヲミルガゴトク作り夕立 夜久  
雨 休 風 又 定 カゼモオヤカニナツ

タル 斷 雲 流 月 却 殘 明  
月ノホノミユルケシキ

又ヨクウツシ得タリ

露 涼 つもと夕立の秋の季へ  
涼の字ど如く夏とす

夏 露 はゆい秋のけりり夕立  
夏の露とよむは

夏 露 はゆい秋のけりり夕立  
夏の露とよむは

夏 露 はゆい秋のけりり夕立  
夏の露とよむは

世の卿をさしたる麻をさす

千首 為尹

しづりゆ世をのびるまづら

まゝ入るふ病のしたる

夫木 為家

友をのりあやまのちのちのち

室のやまのこゝろかま

風薫 南来あり六月

あゝ涼き風あり

連 風くさる々々や浪のむさう

非 帆をかぶる朝のこゝろ

深茅生るるおのれ

青山嵐 青東風 土用のころ

空 一点乃人りり

非 吹風をいへる

非 鏽乃片く

詩 薫風五字對句

堪 露飛堯酒清暑澄潭月

サカモリ ツクスミク 月カクニアツサロスル

薫風入舜絃 開懷累謝風

詩 薫風七字對句 詩礎

毫端蕙路滋仙草 逐風輕

クサモメイクニウルヲフ カセモテクル

絃上薫風入苑春 水亭開

コトノ子丸セニワレキコユ イケンチニキク

暑 溽暑 熇暑 極暑 蒸暑

酷暑 火炎日 炎蒸 燠日

熾日 晷日 炎熱 火天 火あつこあつ

新撰六帖 行家

水 五月のてり日れつりの

あるのちのちのち

新題林 通茂

暖さをとて清てそりはぐ

そり日よまをたけ

非 之のひけり

展 西日け

帆 枝の移り

暑さ

暑さ

暑さ

暑さ

暑さ

暑さ

暑さ

狂 まどろろも百倍あつとも巻天を  
身 みだるらりの私なるは是燕

日盛 ひさか 日れるの牛乃  
地獄や日の夏 井雨

詩夏晝偶作 長孫佐輔

南州溽暑醉如酒隱几熟 ナシヨウブシュサイサカシキニシヒナ

眠開北牖 ヒヤクノキワタリテニヨレバ神氣 日午 ツカレテホホムニク子イル

獨覺無餘聲山童隔竹敲 ヒトサマニシオモフコノコトノ

茶臼 ヒル頃ニ寐タツテサメタレバト コモレツカニシテ物音ナレ童

子ノ茶ヲヒク白ノ音ノミ竹ヤブヲ ヘタテシトナリニキユルハカリナリ

狀 誠暑日起居文 左ハ尺牘

不怪大暑々々々々 けいこゝろ

熇暑 逼人 カサシキヨ 逼人ニ

汚濁福どろろ 水清福

動定佳勝 カサシキヨ

謹献某物 ワシニモ

水園一侍 ミヅノニシ

毫以暑中 ヒツキニ

聊訪問 カサシキヨ

而已 カサシキヨ

尺牘 尺牘

各替上中下 各替上中下

熇暑逼人 カサシキヨ 赤日流金 源暑

密動定 カサシキヨ

居平安 カサシキヨ 興起 暹寧 平生之

休暢居止之祥 カサシキヨ 多快慶幸 愉

然飲躍健羨 カサシキヨ 謹献 以投

言献

言献

言献

送之ヲラレ。聊具イハカク。捧呈ホウテイス。献呈ケンテイス。

奉上ホウジヤウ。訪問ウモン。窥光震之志カウクワシノシ。

訪起居ウモンキキヨ。報平安ホウタマヘン。

同報答ドウホウコタヘ。左尺牒サシテウ。

被惠レヒ。被惠レヒ。被惠レヒ。

幸御食サイニシ。供膳キョウテン。

美味可賞ミヅカシ。殊恩ジュオン。

須謝スジヤメ。

暫待シバシバ。未會ミカヘ。

尺牒シチテウ。昏替コンカヘ。上中下

勞介使ラウケイシ。傳命デンメイ。走使ソウシ。炎日エンニツ。燠ユウ。

日ヒ。熾日シヒ。蒸暑シヤウ。被惠レヒ。厚賜コウミ。

嘉惠カケイ。被投レヒ。分賜ブンミ。魚醢イサカ。魚醬イサカシユ。

美肉ミニク。饗食ケウシキ。偶有ウケアリ。客至カクシ。至共シトモ。

適口タシカク。以饗レヒ。客味カクミ。可賞カシ。口クハ。

美可愛ミカイ。中死ナカシ。潤藜ジュンレイ。莫之膳モクシノテン。殊恩ジュオン。

須謝スジヤメ。拜而受之ヒヤメウケテ。愛我アイガ。至矣シヤ。

九拜以謝クニヒヤメテ。暫待來會シバシバライカヘ。期顧キカヘ。

問叩謝以面モンクツシヤメテオモテ。待問尋マツモンズク。



月清 松下納涼 後京極  
 蝶の羽ふたはてふ家お本くられて  
 秋を中とる庭乃れ山を  
 續千載 森納涼 為氏  
 秋のさきさきふらふらなれり  
 秋風らうた衣のさき

詞 涼。月。袖。衣。水。後入。  
 山。法。那。も。山。法。納。涼。を。お。さ。う  
 よ。あ。く。ぬ。秋。風。か。さ。も。山。下。水。  
 水。は。ひ。る。涼。果。五。ぞ。ま。い。り。  
 泉。は。あ。る。ま。り。水。ま。う。あ。ま。う。は。ひ。る。  
 あ。ま。う。ま。う。あ。ま。う。ま。う。あ。ま。う。ま。う。  
 友。を。ま。う。あ。ま。う。松。法。本。法。ま。う。  
 秋。風。か。さ。も。あ。ま。う。あ。ま。う。あ。ま。う。  
 蓮。草。山。風。夕。風。あ。ま。う。あ。ま。う。  
 松。風。本。法。下。月。月。お。さ。う。月。お。さ。う。  
 水。は。ひ。る。月。お。さ。う。松。か。ひ。あ。ま。う。松。  
 ま。い。り。川。水。お。さ。う。ま。う。あ。ま。う。あ。ま。う。  
 す。り。扇。蟬。本。の。下。月。あ。ま。う。あ。ま。う。あ。ま。う。  
 雨。お。さ。う。あ。ま。う。あ。ま。う。あ。ま。う。あ。ま。う。

夏のまことば... 雨... 松の葉...  
 秋のまことば... 湖... 森...  
 異を避... 松...  
 連... 宗...  
 明... 宗...  
 松... 宗...  
 非... 其...  
 け... 全...  
 け... 松...  
 狂... 前大僧正慈圓

狂 前大僧正慈圓  
 旅の女と大浴并荷ふ夕とくみ  
 うの帳子の汗あひくしあ

詩 暑五字對句  
 水退池上熱 竹深留客處  
 風生松下涼 荷靜納涼時

詩 同七字對句 詩礎

雲連海氣琴書潤

水殿涼

風帶潮聲枕簟涼

青琅玕

沙界樹涼晴作雨

着衣巾

石渠泉聲暗流水

涼風來

詩 暑之詞

何以消煩暑端居一院中

眼前無

長物窗下有清風

熱散由心靜涼生

為空室

此時身自得難更

與人同

スル中ニハクヲサレヌク

晚夏 夏深き夏果る夏暮る

夏より後夏を隔る夏の限り

夫木 為家

夏と秋とゆれあひの移糸あはふ

秋近 秋を待つる秋を隣

草木 此部より六月一ヶ月

百日紅 紫薇花。柏。樹。棗

猿登る事と得と故と名づく

百日紅と猿とより一類三種とも

苧麻苧。白麻。市尾。皮と

麻よりいよしくさけ安し大

繩よりち破のつるし

麻

△櫻麻 花の柄は似たりありか  
△夏引の糸のあさの事あり

△麻刈の排は麻刈と夏ととる  
異名 漢麻。黄麻。麻仁。油は制して

麻の皮とてたて糸とるなり  
夫木 寂蓮

賤の女がふまじしとて居るる  
とくあさまじくありの下風

夫木 土御門内大臣  
かろるをそのまじのまじのあり

とるれ未奈まらるるけしき  
④ ありまらと花はかろる麻宗祇

⑤ 網起へたりまらそのまじの徳元  
⑥ まらとるまらまらとる麻文彦

苧麻 和名かろる。真苧  
かろるその葉のまら

花青ま穂をまらとる出羽最上  
の産より奈良麻を織るもの

是より東国西国まらなく植を畿  
内東南まらまら入る麻と作る

綿の花

むかしは穀皮と  
りて衣服とす

是を木綿とらる長紙のまら  
今衣服又織る小木綿といふ

古名と用ひまらる神人の用也  
木綿たるとも古来の言なり

中世民用専ら麻布と用より  
今の州綿は桓武帝の朝は異

国より傳りる唐土より宋乃  
末より植る本朝より二百年

とるる遅し其後種を失ひて  
中絶したるを文祿年中に

種を得て諸国に植る多田  
綿花黄ま実白く糸よりけしき

尤可けまらる少き今これを  
うへむの蝦手綿葉は深きま

まらる白花あり挑大まら白  
然まらも挑まらるる神樂綿

花白あり黄まらるるありて  
生す神巫の持る所の鈴は

生す神巫の持る所の鈴は



是を植て大に利あり。佐利綿の枝葉赤色を帯ぶ。桃多し。昔姑この種を得たり。聲をひ望めども種をあらざる。聲憤り恨み。其妻を去りし。依て佐利綿といひ。あつせうと。烟草綿。その葉青色にて間々小葉を生む。

新撰六帖 家長

あしまの太わらわぬかしのうへへ綿のたひふそあけら

竹皮散 △竹の皮脱るととまても李にあらるべし

鳥扇 △ひあきさ。本州は射干。同物と云然とも

花形ちぐさり。莖葉まぐさりの長さ。これの射干より莖短く。葉扇のごとく。あひらる。あひらさなり。されども和名ふと一種として射干とわらわらる。と訓よりより連俳にも

射干とかくさる

夫木 西行

さき生いさるさあれと。花の面かくすあきさのさきあひらる

玉簪花 白鶴山大さうりのと俗に亀やじし云

鈎鐘草 地参。紫花といらく形鈎鐘の

又白花淡紫の花あり。非の種まはは付さる名は。越人

麒麟草 高さ一尺。さかり。形并慶州に似たり

馬鞭草 馬折。鐵笔草。花を色とりて穂の

あし一六七月花とひくくへ

夫木 俊成

紫はる小遠みわへらまのらむつりげたる世ふらるる

猫兒眼睛草 澤漆。此草の形

燭臺のつた故。燈臺艸と云  
野は多く自然と生るる草

剪春羅 春羅。漢宮春。  
眼皮の俗字なり

花の大きき銭のおと  
○さうさ眼皮。紅白さうたさ

狂人のさけりる所解らるる  
花の生にん布ててそ見ま

虎尾花 花白く虎の尾  
のやうに似たり

晝顔 鼓子松  
旋花

非登教 米抽き心表之世蕉  
左

狂 寺子やの登上りてふかそと  
教へ白くや花の咲く人兼卿

夕顔 盛盛 紙瓜  
祭の花

六月頃白き花開く登はま  
夕方は咲く故は名づく

⑤ 夫木 定家  
けりするを方人の神りとよ  
あすふくはゆきゆふなれを

十首 垣夕白 為尹  
かゆりの竹乃あは経末こえて  
あふふくはゆきゆふなれを

詞 白香 あはゆきゆふなれを  
根根。縁々。縁々。光りともる。咲て

⑥ 連 夕魚のあがかりて  
夕魚のまゆけき垣根は 宗養

⑦ 排 夕魚や一白のす花の表其角  
夕魚や白き鶺鴒垣根より 左

⑧ 夕魚 又新炊屋さ葉を引越人  
庭はこれの内候はらじ夕う月や

⑨ 夕魚 庭はこれの内候はらじ夕う月や  
さうは夕うも軽い喜り門 正名

詩 夕白五字對句

幸結白花了 松虫声不去

寧辭青蔓除 暮雀意何如

瓠。味其之故苦瓠。對。て切のひやうと名づく形色を有

瓠のかり物の長ふくべなれを浪花木津難波今宮住吉

炭斗に作るかんびやうの皆

蘆と云かんいやうといふハ瓠と

浮の意くろりて酒器小制

千瓢。新千瓢。土用中ふむとて不

寸河内根津は多し伊勢より出でても味おもしろく

苦瓠。瓢草。夕顔と一類はて別種味よし

夫木は世ろくを好むひは種

商陸花。花白赤あり白花のの根も白

山慈姑。俗黒くくは花淡赤色此根解毒丸如

鷺草。花白く鷺に似たり連路草の葉大なり

蒲穂。香蒲。穂の形銚に似たり故蒲銚といふ

蘿摩。花紫白色秋実と生と

绿豆。花黄。和名やえちりといふ

艾實。花紫。花の下に実まじ生す

草。水草。正字。燕尾地錦。花黄。慈姑。草と云

形燕の尾に似たり。根は白く  
この一根は歳又十二の子で生む  
沢渾と名をさうして古人乃  
非借まもよそたり誤りあり  
沢渾の和名はまゝめと  
いへておのころの名なり

非 河骨の石より純子ゆ嵐雪  
河渾やる骨若く雨あり野童

河骨 萍蓬草 非 河骨や  
松よまをゆる夜半樂嵐

菱花 菱。菱。五六月小  
白花開く 夫木為家

舟こころたかくも淋し音はるま  
菱花を五やほくくく人

詩 菱五字對句 同上

浅渚菱花亂 蟾影搖輕浪

深潭荇葉疎 菱花映淺流

詩 同七字對句 詩礎

松葉正秋琴韻響 翻池上

菱花初曉鏡光寒 小池清

詩 菱花之詞 唐 李嶠

鉅野韶光暮 東平春溜通

影搖江浦月 香引棹歌風

日色翻池上 潭花發鏡中

五湖多賞樂 千里望難窮

蓮花 蓮花の葉の繁  
似たりと云ふ

異名 花君子 藕花 水花 風露即

池見草 露堪草 蓮ハ

泥より生してまろく清浄なり  
性糞溺を忌む周茂叔が云く

里ノ眺望  
ヤムコナン

菊の花の隠逸ある月の牡丹の花の富貴ある月の蓮の花の君子ある月のありと

⑤ 文治百首 西行

とちかき月の内を中へ池よ  
ところをえてれうく蓮うか

夫木 蓮開水上紅 千里

秋近く荷あけくあけうへ  
くれみ井あけくぞぞうへ

山家 蓮満池 慈鎮

よのけり月やうへく  
池よ蓮乃花さけみあり

詞白入海りかまぬ 蓮  
さふれあけく月 蓮はあけく

中へ 蓮の葉の蓮の上や  
どふたの池の中へ 蓮はあけく

蓮あけく池あけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

蓮あけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

蓮あけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

蓮あけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

⑥ 非如の草に欺くはれ蓮外其角  
泥坊の教へ水のそりてか 全

狂花痴小ははれくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

あけくあけくあけくあけく  
あけくあけくあけくあけく

採蓮 崔國輔

玉淑花爭發 金塘水亂流

花并カリナル頃ハ水 相逢畏相失

並著採蓮舟 花サカリノ頃ヲノバ

遊ント舟ヲモヨホスナリ

又 明 申時行

碧沼停寒玉 紅蕖映綠波

白紅ノ蓮花ガサキテミドリ 粧凝

朝日麗香逐晚風多 花ノ色

出飛揚翠羽過 游戲金鱗

納涼依水榭 還續采蓮歌

ス、ム所ハ水辺ノ臺ニアラビ

曲池荷 盧照鄰

浮香繞曲岸 圓顯覆華池

香氣紛紜トシテ岸ヲメクリ 圓ナル花

常恐秋風早 飄零君不知

秋早ク花ヲチテヤラシメテ今ニナラン

○金絲蓮 紅花 金色の筋あり

甚と珍なり ○大紅蓮 花淡紅

色芭蕉の花に似たり花ありて

実のくす ○天竺蓮 花紅千葉一

列又初く昼夜にまます蓮

ハ子の名より 菡萏ハ花ノ名

ハ子ノ名より 菡萏ハ花ノ名

何葉 浮葉と藕荷と

あつゝの葉と荷とつゝの根を藕

とつゝの花を蓮とつゝの荷縫水芝

夫木 定家

能 夫木 定家

能 夫木 定家

翠葉多雨又多地的水のみ道之  
心枯く蛙のこもるうけり風光  
狂君又よほり花のまはるる  
水々味晴をほみそ笑く七貞古

詩 荷葉季對句 同上

綠水飯香稻 依崖假松蓋

青荷包紫鱗 臨水羨荷衣

詩 全七字對句 詩礎

挑花尚憶當年宅 荷花香

荷葉堪為卒歲裳 聞菱荷

新荷 唐 李羣玉

田々八九葉散點綠池初

水圓陰已蔽魚 葉イニ若葉

同 然レ正九キ葉ハ 浮萍渡カ

合 弱荇繞猶疎 二サヘキラレテ

波底芳心卷未舒 ナカバハ波

蘭花 虎鬚草 碧玉草 燈心草

夫木 川ふもさくや河名のおいさ

とた打みわい一夜糸をよ

とろとんと製さる小刀で持て

指を押し皮とさけて燈心を

出さる九六斤うそ燈 刈蘭

主用入て刈るり豊の表小用

ゆわの備後と上品とす女のす

まて此業とくけひ一日ふ二枚

うとさる女媒人まるとさる

席草 長ハ琉球とつて同

下品 **刈菅** 土用又入晴天

日ふりし 上されば色ようざ 立にあへ七色あはくさび入る

**藍** 夏より二番刈の秋 京都の産をよと

と根をば あざざし 刈るゆへりぬとて用ひ色うつく阿州

不多く作る其葉も大なり

**新撰六帖** 知家

刈る あざのそと 秋の季に

**新撰六帖** 知家

あはく と深し 秋の季に

**新撰六帖** 知家

あはく と深し 秋の季に

**連** 夕日まを 秋の季に

**非** あはく 秋の季に

**青月田** 六月青と田の景と 秋の季に

**連** あはく 秋の季に

**田草取** 五月の 秋の季に

**蘆茂** あはく 秋の季に

**林檎實** 文林郎果 秋の季に

**詩** 林檎五字對句

**艶和蜂蝶動** 香帯管絃聞

**早桃** 扇ふもの 貞徳



青魚燈 酸漿草 青蕃椒

俗名南蛮胡椒。又高麗胡椒と云。秀吉公伐朝鮮時渡る故名付り

藁荷子 俗小夏あると夏あると秋生ると秋めく

凌霄花 異名紫葳。陵時夏より秋まで花と開く

詩 凌霄花之詞 吳震在

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙女ノ名酒

宴せし 醉裏從他寶髻斜 酒ニ

エフテ髪モカタフキタリ 遺下玉簪無覓處

髪ヨリカンサレヲオトシ尋レ死ニハス 如今化作一

林花 今其カシガ化レテ花ト出シト戯作レナリ

風蘭 註蘭。仙草。風と好て茂る故名づく

非凡常や風 花黄色 汐見坂 汐見坂のり

神馬藻 銚子の歳旦より 信貫

いふは海よりゆきわたるその本は丸居といふそへま

豇豆 小角豆△青豆△げ△十ハさげの花白

非 瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鸞瓜を上品とすこれふよりて今

瓜 種類多し多甜瓜

甜瓜 瓜を上品とすこれふよりて今

瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鸞瓜を上品とすこれふよりて今

瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鸞瓜を上品とすこれふよりて今

瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鸞瓜を上品とすこれふよりて今

非 瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鸞瓜を上品とすこれふよりて今

瓜 瓜の種小温公よりや美菜瓜起波

狂 瓜つとてらるるに海へ瓜白田

先へ瓜さつて瓜を仇まらるる千楯

〇人く集りて万法に空也法

問をさせし時寂蓮法師の瓜也

皆空よかるるも瓜のるる瓜の

け瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜皮 松山侯の御前

瓜の句の有りて皮をて發

句せよとありけり時其角畏りて

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜 瓜の種小温公よりや美菜瓜起波

狂 瓜つとてらるるに海へ瓜白田

先へ瓜さつて瓜を仇まらるる千楯

〇人く集りて万法に空也法

問をさせし時寂蓮法師の瓜也

皆空よかるるも瓜のるる瓜の

け瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜皮 松山侯の御前

瓜の句の有りて皮をて發

句せよとありけり時其角畏りて

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜 瓜の種小温公よりや美菜瓜起波

狂 瓜つとてらるるに海へ瓜白田

先へ瓜さつて瓜を仇まらるる千楯

〇人く集りて万法に空也法

問をさせし時寂蓮法師の瓜也

皆空よかるるも瓜のるる瓜の

け瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜皮 松山侯の御前

瓜の句の有りて皮をて發

句せよとありけり時其角畏りて

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

瓜の皮も瓜の流るる瓜

ののを... 大坂の東黒門と  
いへ所不作る上品とす唐の青

門瓜上品とひる又偶然...  
味少く... 菜瓜

甜瓜の種を時て... 菜瓜  
味少く... 菜瓜

の頃本朝へ種を得て長崎小作  
るを... 諸国を... 形ち

丸く... 南蠻...  
よ... 南瓜の名あり

南京瓜 南瓜と同種類  
形び... 瓜

か... 唐... 瓜  
地より其始出... 瓜

阿古陀瓜 是ハ甜瓜  
煮... 瓜

季とも... 又秋の季も  
と通俗志其外多く秋

出... 花... 夏... 用ひ  
花と... 秋... 用ひて可

る... 時珍... 南瓜を  
八九月花ひ... 瓜

とあり是... 花... 季  
五月と... 瓜

の... 記...  
楮花

楮花 紙... 草... 楮... 制  
黒ひ... 上紙... 紙

つ... 防...  
多く作... 青... 紙

み... 其外...  
○秋葵... 楮... 別

あり五月花咲く... 同...  
紫蘇

赤蘇... 挂... 塩漬...  
して食... 二種あり

六月 草木

六月 草木

六月 草木

**蒜根** 夏よりして長く食毒を  
解し悪瘡を灸付

**葫荑** 夏実とて生るるの香を  
しこれをも悪臭とて去

香のききよめて食て後この物を  
少くく入るゝ忽ちあき香を去る

痘瘡けがきを去る法 この実  
をでんとてわづらふ

さらし痘瘡の色 **藕実** 和日  
のききよるる

藕樹の皮を剥き水にたぐり  
蒸すかきかき去りて制す

**夏切茶** 茶と賣處の家  
六月新茶と壺へ

紙をこき封じ壺に賣り  
是と買ひ封を切ると遣ふる

**種植** 此部は草木植る壅  
培採るの事との事

**種植** 先月より今月も種べし

**茄子とあひ法** 花の咲く  
時分その

葉を取りて四つはよ捨るるを  
以丸く灰をかきあげて其上を

入るぬすれ壺にかけ  
ひたくさんまらるる

**壅培** 橙のたるる等又芽の  
の灰羊の糞とつらえ

実する事おしし菊は  
土用の後ふやとかくべし

**灌水** 此月暑氣はくたゆへ  
日中水とそげん

かまろく晩よりとそ朝  
こやく水とそぐべし

**採採** 麻草のな燈州席州  
とげ右のか此月刈る

**生類** 此部より六月一ヶ月の  
生るものとあひ

**燈蛾** 燭蛾の火蛾の飛蛾の形黄  
蝶に似て枯渴なり云

蟬の諸聲 多くかまひもくくさくさつら

蟬脱 空蟬の皮とぬき  
空蟬もさうとつら。空蟬も

その皮とぬくとつら。又生  
つらとつらとつら

夏虫 夏の虫の虫とつら  
新撰六帖 光俊

はよとつら火よりの友とつら  
つらとつらとつら

狂 夏虫ふさふさのつらとつら  
き披とつらとつら

残蠅 蠅の秋とつら  
季六六月

金龜子 蚊蠅のつら  
鳥毛虫 蚊のつら

蠓 俗水道蠅とつら  
酒をい生とつら

鱗鱒 一名地虫又根堀虫  
やく土中とつら

糞土中にも生とつら  
練雲雀 卵

麦白中は産むとつら  
かひ直とつら

五六間も腹旁とつら  
歩いて常のつら

入るゆへ網楹の禍は  
かへてつらとつら

のつらとつらとつら  
練雲雀とつら

〇一説ふ音をいさつら  
〇一説ふたのつら

鶺鴒鳥 たふひとつら  
とつらとつら

ひさりの羽とつら  
とつらとつら

川狩 〇〇〇〇〇〇〇〇  
等とつらとつら

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

**鯖釣** 青魚。其色青。故曰鯖。名づく大なるものと鱈。

魚と名づく和名ありと名づく  
つら海の中にて釣るなり

**海月取** 海母。れもわか  
仲正

我々の海の月をきまらつる  
くくげれわにありよと

**必用** 此部より六月一ヶ月必用の  
の支養生の法等と集む

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
	午の方	未の方	申の方
軍	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
	酉の方	戌の方	亥の方
向	朝六ツ	朝五ツ	辰四ツ
	子の方	丑の方	寅の方
方	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	卯の方	辰の方	巳の方

**日刻** 未の日未の刻事と  
目より用むべし。此月建  
しつら

**出行作事** 東の方へ向ひて  
よそへむと六月のつらむ  
今日天道

東又行くが故きり又西北の方  
へ行くは用捨あり味方よして  
の利なき敵となりて利あり  
西南の味方より利あり

**樂事** 詩にも六月徂暑と  
ゆき  
朝早く起出

て見よい葉の味は蓮の花も  
寺院の池清らふ香ひは折く  
雲起りよ夕立のけりよ一陣  
ありよあとの木々のつらむ

**天氣** 水の質は清く流音

當月の長雨より事すく雲出  
雨を催せども天の陽氣つれぬ  
よして陰雲の氣消て晴ふなる  
こと多し此月能天氣とつ朝

東風より朝ありしつら四ツ時  
分より次第小南へまより西か  
れるとよとつら此風より出せ  
雲も晴を照りく五穀豊熟

とされたり日暮まるとり次第に  
北へ替り北東風かかるこれと  
夜北より昼の照つちと吹はぬ  
露をぬる稲小甚よう此天氣  
づく時折々夕立 **風** 申酉  
去て人病もとくは

吹を西まぜといひ日和つてさて  
より○未申より吹を沖気と  
いふ朝ごとく曇まども日和つぐ  
のころはとも日々曇り雨げ  
去れふも此日和長きものそ  
其うちらとより出せばそれより  
晴るかともり人が未申に沖より  
雲をのぞいて雨とさうくして

づまふも長きをほくものこ  
○北西の風とあまぜといふ雨さうぞ  
曇むと夕立もせむ○東風は  
けて吹は雨ふるは夜露路を  
あげぬ○東北の風久しく吹  
て空晴くると日和東風といふ

十日北日雨うず然れども  
終い雨ふるるとあるべし○東北

東南の風小て曇まひ **雲** 南  
湿氣にふる下地なり

小宜し **朝霞** 東方日出を  
小宜し **朝霞** 東方日出を

あけり久しきは是ひてりはく  
○朝東方あかく満天へうつり

あけり三日は内雨ふる  
とて朝やけと雨といひ **夕霞**

西赤く南へ廻るは日和より秋の  
氣ふるは北へまるとより○

久しく旱の後山谷と **占候**  
あやさい翌日雨ふる

此月暑氣薄けまは五穀はら  
かす蠶ふはまは新舊の米價貴

一○白雲北斗の下小横くは  
雨とまると月内西北風吹は稲母

○白雲北斗の下小横くは  
雨とまると月内西北風吹は稲母

批あり。今月西北風はくきて吹い日和より夕立もせず又この風をまは冬河凍りて舟は通ひ不自由くの二十七日二十八日辰の刻風と主る。東風久しく吹と好す東風の吹と夜露をみらる。稲生長に帷子を着せ袴は浅黄衣服式帷子を着せ袴は浅黄

小紋。継上下の畧義線子肩衣の嚴暑と凌くを以て後製のもの之式礼の時女即花時衣衣は青

吉。瞿麥朝日よみ女衣服帷子を着せ

衣おきて薄す女衣服帷子を着せ

さう之上縹らみ或は

ととゆうのいふものをめしと

嘉祥此月乃祝儀の地生

花之式正百合 養生

心旺腎衰へ精化して水くるよくばりて腎氣をかこみ

さぐり冷水にて手を洗よと

五臓をかまひ沐浴又冷水を

足と洗ふべし風にあたりて脚

ととまき生冷の物を食と

うすくべて是をゆせば秋不至

アそ瘡疥を發すありと云

病の此月ふ多きハ陽と受く

癸とく地まは強て驚く小

妙藥方

夏暑よあてはるる中暑とて香薷散を用

中香薷 厚朴 白扁豆 茯苓

○老人虚人ハ清暑益氣湯人参 白朮 麥門冬 五味子 橘皮 甘草 黄栢 黄芪 當歸

○霍乱ハ霍香正氣散

○時氣よあてり又ハ食傷枇杷葉湯

枇杷葉湯枇杷葉 蘇香 茯苓 中

吳茱萸小 甘草小



冬月凍瘡と發せらる

妙術 當月とぐまて暑き日 大蒜とほきねららば

手足に塗きい冬、瘡あらうと發せらる事妙るり

厭敷拔し妙術 今月熱と取り黒燒

して石灰と砥石と右三品と合せ壺に入れて水と入米と入米の

さつげらる時あごより血と出でしはちし紙うてらこんり

鰻松明た法 蒲穂を正し油を塗り又

わけて油とゆりて又下すかやいさら事三四度して其上と

鰻の皮うて巻き又油をゆりゆいて火をとりせば雨中みも

消る事さるは

六月飲食并料理献立

好 温暖のものがあつひにかききりものとらふに宜し

禁 生冷とくひのこころといひの垂。物野鴨雁あひと食へ水痕生を

養飯 水つちめく△水飯ともかく△洗飯。飯と水と洗い食ふ

非 あ飯をかかぬと瀛會せじ瓜のあつく其角

精 △乾飯△引飯△冷水のいにて食ふ河内道明寺の作る物甚は

冷索麵 △冷麩。ゆぐく冷水ふひこつたるもの

狂 狂は此をて李白見えせん索麩の血よりはやく游のあき系梅子

瓊脂菜 石花菜△心太(非)あき系のもろ折つと出せば心太沽風

狂 系のものたつとろつてんやのつた出の價でんきのまかりしな 遠舟

料理汁

ヤサアヒ  
大ろん  
ミツウグのこ  
ヒヤウの  
タマキ  
ミツウグ

皮ふぐ  
一口茄子  
ヤサアヒ  
塩  
ミツウグ

清汁  
ミツウグ  
ミツウグ

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

青い  
干大ろん  
ミツウグ

青い  
干大ろん  
ミツウグ

青い  
ミツウグ  
ミツウグ

青い  
ミツウグ  
ミツウグ

竹の子  
ミツウグ  
ミツウグ

竹の子  
ミツウグ  
ミツウグ

差味

青のり  
ミツウグ  
ミツウグ

煮物

のり  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

吸物

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

精汁

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

大豆  
ミツウグ  
ミツウグ

大豆  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

清汁

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

膾

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

大ろん  
ミツウグ  
ミツウグ

差味

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

煮物

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

大推茸  
ミツウグ  
ミツウグ

大推茸  
ミツウグ  
ミツウグ

青い  
ミツウグ  
ミツウグ

青い  
ミツウグ  
ミツウグ

竹の子  
ミツウグ  
ミツウグ

竹の子  
ミツウグ  
ミツウグ

吸物

ミツウグ  
ミツウグ  
ミツウグ

和會物

和會物

六月食物用意の品

醬油造 △納豆仕込

一は造 △奈良漬製を

右の品々はとうとうつちあやう季  
しく日本歳時記といふ各出う

水の粉 △葛粉水 △砂糖水 △  
振舞水 △冬も夏の物

麻地酒 ○暑中夏酒を  
美濃。豊後又い南

都より出る浅茅酒もいふ  
能研てんがなまぐり持たはる安成

干瓜の法 瓜を二ツに割り  
中子と去りハ

九分や塩と入一夜を  
ふけをた明日取り出上  
下々おろす 干茄子法  
日は干とす

て煮る 大豆塩漬乃法

米糍一斗の塩四升合せワケ  
さげをさやまぐ漬をひ久

しく損せど茄子は 甜瓜を  
又此如くすれよ

久敷貯入法 打綿と箱ヤ  
うの物又入

其中へ瓜をつみ蓋を能く  
つて瓜をこめをひ百日の持るう

尤土用 瓜茄子の類年

中貯法 寒の中の潮を盡  
入たくり夏

瓠瓜茄子の類を漬をひ色  
うらぎして久く持つ潮

より五六丁と沖の潮より江  
いちやみけよくして悪

甜瓜年中貯法極秘傳

随分大瓜の蒂より頭よはとあ  
かりを著して穴をあけ其口を  
明礬と二匁を入木灰と靴半  
分をまぜて都合一斗をうけ塩二  
升入るけりこれを漬置キ桶よ  
てせつがくそり口をうけ風の入  
ざるやうにまぐへ今日漬をこ  
九月より末勝手ふ出してつら

べし味ひいそくま 酸将水子  
撒じら事ふし

と貯法 色好赤とると枝と  
り土用の井の水か

漬をれ秋に至て又水で替へ  
かくのこくすれば外の壳紗は如  
く遠通てやうつきさ  
も酸よけしとよう

夏月

氷と寒中れ如く捨る

法 銅の器小厭すを汲りくる湯  
を入口と能けり水は入らぬ

やうわで井の底へおりうと付て  
沉み半日一日や置て取上る

寒中れ氷を少くもかり守夏の  
内煮凍と持る小膏粉など用ふ

及つと至極よ 又法 つわ水と  
く出来らるる

口として釜と湯と泌し其内へ  
入しをど湯玉のころ時取上て井

戸の中へ入まは 青瓜越瓜

年中貯法 瓜を四割ふ  
して塩をぬ

ア下し一日置てのり新酒乃  
樽を詰り張こめ置ハ年中変

らむ時分の生此 茄子瓜  
如くうらじこりぬ

大角豆青漬法 五井塩

二件右二品り合せ瓜大角豆  
ろきり漬きくべしつらまぞ色  
青々として生れど但  
風のつらぬやんをへし  
白瓜

翌年まで青く貯置

法 赤土一抔 塩六抔 五合右赤  
土より碎きくべしつらまぞ色

所は合せをきく白瓜二つよりめて  
中ごころを能くくへ右の土めて

つ布置べし来年  
もぞ色くくべし  
夏煮火

凍をこる法 鯉らま其外  
海魚こそと

精進物こそとなきこそ又ハ醬  
油もどめて煮る中へ石花菜

と四角は切りて五つほど入よく  
煮て鉢へかけ水は冷し置て

用也 魚肉久敷貯法 魚  
べし

の中へ胡麻の油を火へ入置て  
久しと経ても臭くす

煮熟する物臭く

さふ法 煮ちくくもの何  
によらず明日まで貯へ

置るれ時ハ大ぬり壺の口いろ  
きりのよ藁の灰の乾きとを

底やき其煮くものど碗よ  
さうくもより右の灰れ上母置

壺の口とちいれ布蒲團よて  
おろしその上は平瓦をおりし

て風をさうさ守氣れぬぬやう  
れをれ土用の日盛ふも一夜

越て臭くす板明日取出し先  
鍋を焚熱くしてそのま

綴して煮調べし若きりく小  
てりとり出して油断をれを味

唐納豆の法 京こそ  
ハ浄福

寺納豆といへ土用前より麥一斗  
 大豆一斗麥をい蒸し大豆ハ  
 焚二品を能まを合せ土用の内  
 小糲み祢まをこ四五日晴天干  
 縮ひくひくく挽くひくく挽くへ  
 用中よ水ハキに塩ニキ煮之  
 して能く此水を右の粉と  
 ませ少くは入てちひるなり  
 ちひる小口傳わり少くづ入て  
 むろくくまろの合せにさうもふ  
 をろくくろく加減ありさうま  
 らうな人の悪く是を白く入まて  
 けと桶小入て七日置て又つく  
 又七日ゆくふつた以上七度つく  
 八九月の項よりゆるその時取  
 出し七日は黒く色甘をふ干あ  
 げてはかた木の葉に上下ふた右の  
 納豆とだんご程よりいしてさへくの  
 べまひて上よりお世でかけるなり

